

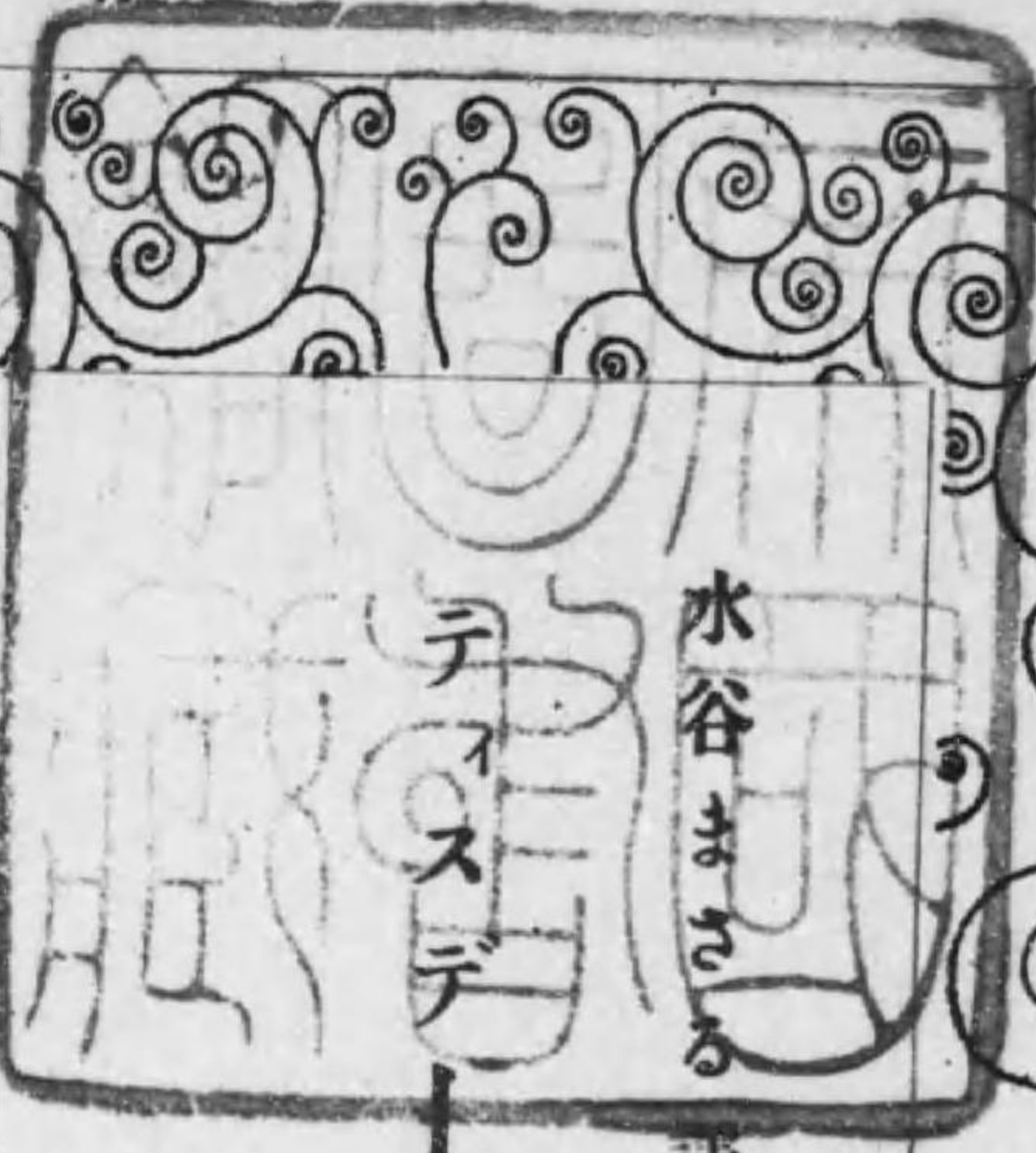
516

360

始

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5



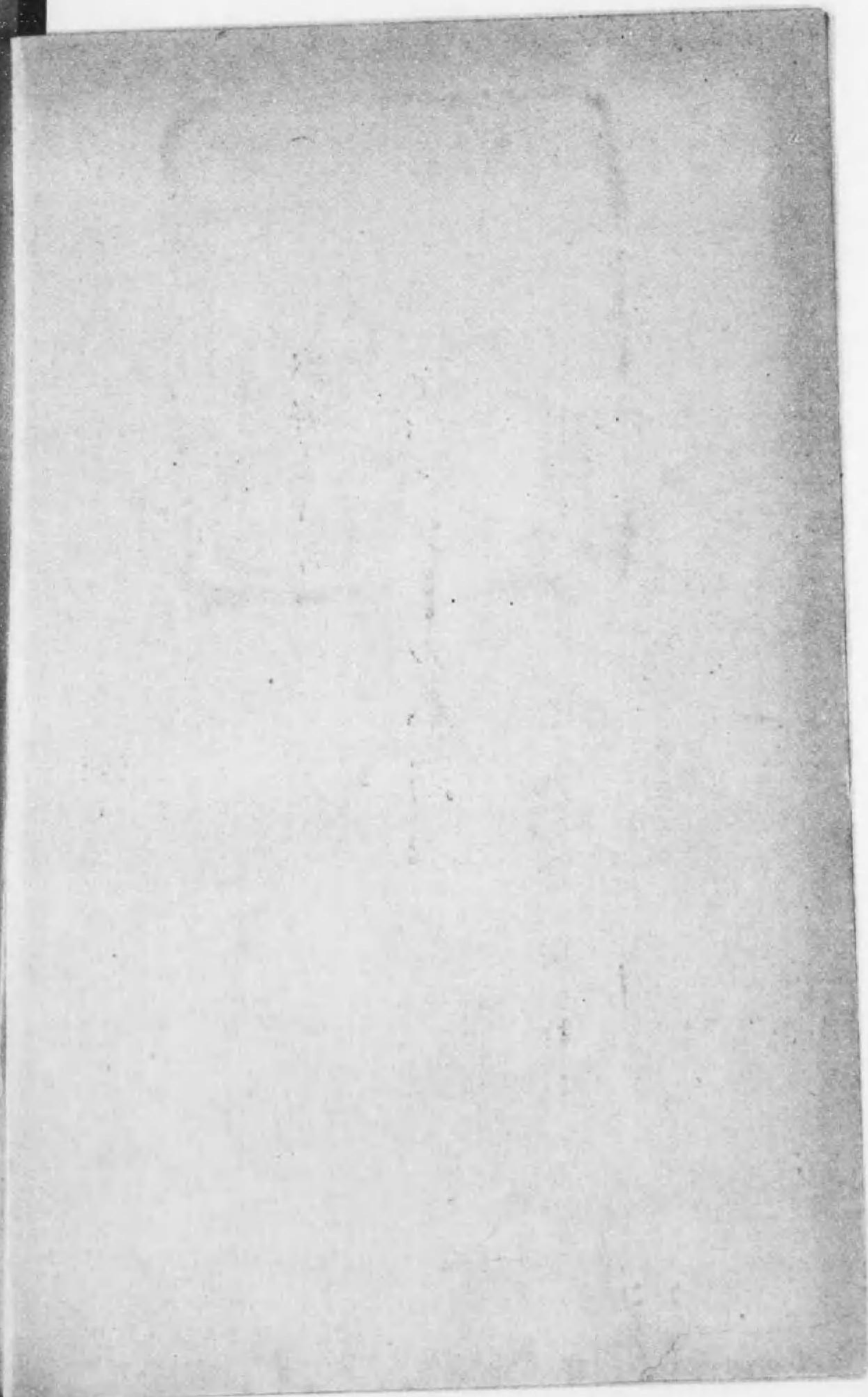


水谷まさる 譯

テニス
ル
小曲集

交
蘭
社

大正
14. 9. 15
行 内交



516-360 1

譯者の序

サラ・テイースデールは、わたしの好きな詩人の一人である。

その詩には、明るい灯のなかへちらちらと消えて行くやうな、はかなさがある。

また、若い勇士の持つ剣のうへに、ゆるやかにたなびく影のやうな冷たさがある。

同時に、嵐にも折れぬ草花のやうな、かよわいなかの強さもある。

云はば、女性の持つやさしさと、鋭い理性と、然えあがる熱情との詩である。

然も、技巧を支配して、充分に言葉を驅使してゐる。響きはあくまでも音楽的である。おのづから浮びあがる美しさが、一度その詩を読んだ人の胸を、あやしくも震えさせずにはおかないのである。いつも多くを語らないが、ひきしめた言葉々に、多くの意味をになはしてゐる。

ところで、サラ・テイースデールは、北米の閩秀詩人である。もう四十近いが、または四十を一つ二つ越してゐるくらゐの年配だ。け

れど、彼女はまだ特異の地位を、北米の詩壇に持ちつづけてゐる。昨年わたしが北米へ渡つた時にも、彼女の詩は有力な雑誌に、よく發表されてゐた。

茲に今、譯出した詩は、珠玉の詩を、いためたそしりは免れないと思ふが、なるべく原詩と離れずに譯したものである。そして、わざと、平明な言葉を使つて譯したものである。これを読んで、原詩を讀まうと思ひ立つ人が、一人でも多ければ、わたしの役目は済むのである、前にも云つた通り、原詩はどれもこれも、魔術をかけたやうな、氣持のいい詩である。文字もけつして難かしくはない。そ

れでゐて、流麗な響きを出してゐるのだから、原詩について、味ふことは、非常にいいと思ふ。

なほ、彼女には五冊の詩集がある。第一の詩集は一九〇七年に出版された。ここには、一九一五年の出版にかかる「海へ注ぐ川」と一九一七年の出版にかかる「戀の唄」と、それから一九二一年の出版にかかる「炎と影」との三冊のなかから、わたしの好きなものを選んだのである。

十四年七月

目次

埋めし戀	一
了解	四
言葉ではない	六
星	八
酒	二
いらつしやい	二
財寶	六
夢の家々	八

○ ほかの人たち……………二
 ○ 夏の夜、河畔……………二
 ○ 今 夜……………元
 ○ 泣 き 聲……………三
 ○ 灰 色 の 目……………三
 ○ 賜 物……………三
 わたしの心は重い……………七
 晝 と 夜……………元
 目 つ き……………三
 四 月 の 夜……………四
 四 月 十 一 月……………四

○ ビ エ ロ……………四
 ○ 別 後……………五
 ○ 戀 の 後……………五
 ○ 河 ……五
 ○ 唄 の 樹……………六
 ○ 平 和……………六
 ○ 四 月 の 唄……………六
 ○ 愛 の な か に……………六
 ○ 祈 禱……………七
 ○ 寶 物……………七
 ○ 夏 の 嵐……………七

〇〇	見られざるもの	106
〇	苦痛	109
八	時	111
與へる人		113
〇	神秘	115
〇	負債	119
〇	夢でばかり	121
〇	薄明	125
〇	過失	126
〇	氣にとめまい	128
〇	愛してよ	130
〇	風	131

〇	長い丘	74
夕暮、紐育		77
思ひ		79
天國の涯まで		83
飛沫		85
〇	六月の夜	88
〇	冬の星	91
〇	朝の唄	95
〇	玖馬の園で	97
〇	五月の日	99
星を知つてゐる		101

あなたのもの……………一三四

○ 洋 燈……………一三七

○ 余 燼……………一三九

○ 音 信……………一四三

○ 冬 の 夜……………一四五

○ 報 償……………一四八

○ サンタ・バアバラ……………一五〇

○ 愛しました……………一五三

○ 牧場 雲 雀……………一五六

○ 變らないでせう……………一五八

○ 心 の 夢……………一六〇

○ 忘れてしまひませう……………一六二

接 吻……………一六四

○ 歸 宅……………一六六

○ 充 分……………一六九

○ 歡 喜……………一七一

○ 鐘……………一七三

○ 春 の 雨……………一七六

海外での小詩……………一八〇

一、シアララルタル沖……………一八〇

二、アルジュエリ沖……………一八三

三、ネーブルス……………一八五

四、カプリ島……………	一八七
五、アマルヒでの夜の唄……………	一八九
六、ヘースタムの廢墟……………	一九〇
七、ローム……………	一九三
八、フロレンス……………	一九四
九、ストレエザ……………	一九六
昔の唄……………	一九八
最　　後……………	二〇二
○水　　蓮……………	二〇五
○知らないの……………	二一〇
×ひざりぼつち……………	二一四

テイーステール詩集

水谷まさる 譯



1

埋めし戀

わたしは木の下に

戀人を埋めに來ました。

高くて黒い森のなか

だれにも見えないところに。

わたしはその頭に花もおきません。

その足もとに石をもおきません。
だつてあんなに愛した唇は
苦かつたのですもの。

わたしはもうあの人の墓へ
行かないでせう。

だつて森は冷いんですもの。

わたしはできるだけ

喜びを集めませう。

2

わたしの手に持てるだけ。

3

わたしは日影のなかに

一日ゐませう。

はろばろと風が吹くところに。

けれど、おゝ、わたしは

夜は泣くでせう。

だあれも知らない時に。

了
解

ほかの人たちのことは
よく解りました。

日に輝く浅い

海のふくらむ波に

透いて見える

灰色の海草のやうに

4

ほかの人たちの思想は
明らかになりました。

5

けれど、あなたばかりは
解りませんでした。

あなたの精神の秘密は
かくれてゐます。

古い西班牙船のなかに
入つたまま

その昔、冷い水底に
沈んだ黄金こがねのやうに。

言葉ではない

それは語られる
言葉ではない。
二つ三つ言葉は
語られるけれど。

6

7
また、ちらと見る
まなざしでもない。
また、頭をふと
曲げることでもない。
それはおさへることの
できない心の
ときめきなのである。
いとも軽い睡眠ねむりを
ねむるところの

記憶の目ざめなのである。

星

8
夜^{よる}ただひとり
暗い丘のうへ
まはりにはあまたの松
香氣とその静けさ。

9
頭上には
星充ち溢れた空
ある星は白、ある星は黄
またある星は、ほんやりした赤。

数かぎりなく
動悸うつ火の心臓
悩ませ疲れさせることは
「永世」にだつてもできぬ。

大きな丘のやうな
 空の圓天井まるてんじやうのうへ
 星々がいかめしく靜かに
 進むのをわたしは見守る。

わたしは今や知る
 かかる壯嚴さうごんの
 目堵者もくとしやである譽れほまを

になつたことを。

酒

わたしは死ぬことはできない。
 三日月の酒杯さかづきから
 喜びを飲みほし、
 がつくと男たちが
 パンを食べるやうに、

香かんばしい六月の夜よるを
愛したからには。

ほかの人たちは
死ぬかも知れぬ、けれど、
不朽の輝く酒を
美に求めたわたしだけは
なにかすばらしく
變つた逃げ道が

12

13

ありはしないであらうか？

しらつしやら

しらつしやら。
青ざめた月が、
花びらみために、
春の眞珠色の
ほの明りに浮ぶ時、

いらつしやい。

わたしをつかむために
両手をのばして、

いらつしやい。

わたしを吸ふために
唇をすぼめて。

いらつしやい。

14

だつて私は飛びまはる

15

あはれな蛾で、

過ぎて行く歲月の網に
捕へられてしまふのですもの。

わたしたち二人は、

こんなに愛情をこめ合ひ、

熱意を持つてゐますけれど、

やがて草のなかの

灰色の石みたいにな
るでせうもの。

財 寶

16

わたしはじぶんの思ひ以外に
財寶を持つてはゐない。
然もそれらはわたしにとつて
充分な富なのである。
あなたを思ふことは、
記憶の造幣局で

17

鑄られた金貨である。
わたしはそれらを唄のなかで、
使はなくてはならない。
なぜなら、思ひといふものは、
黄金と同じやうに
不朽を得るためには
死のこつち側に
残さなくてはならぬから。

夢の家々

あなたはわたしの
あまたの空虚うつろの夢をとつて
深切と高貴と
四月と太陽とで
その一つ一つを
充みてしまつた。

19

わたしの思ひが
群むらがつてゐた
あまたの古い空虚うつろの夢は
明をささえてゐるにさへ
あまりに幸福に
溢あふれてしまつてゐる。

おゝあまたの空虚の夢は

かすかだつた。

あまたの空虚の夢は廣かつた。

それらは楽しい影の家だつた。

そこにわたしの思ひを

隠すことができた。

けれど、あなたはわたしの

あまたの夢をとり去り

すべてを眞實なものにした。

20

21

今やわたしの思ひは

遊び場を持つてゐない。

そして、今や

なんにもすることがない。

ほかの人たち

ほかの人たちと話す時には

いつでもわたしは

あなたのことを考へる。
 あなたの言葉は、
 ほかの人たちの言葉よりも、
 ずつと鋭い。
 然も、ずつとやさしい。

ほかの人たちを眺める時、
 わたしは、あの灰色の目と、
 暗い皮膚と

それから、あの擾みだれた頭かみのけ髪の、
 あなたの顔が
 あればいいにと思ふ。

ほかの人たちのことを考へて、
 日中ひなかひとり夢みる時、
 あなたのことを思へば、
 強い風のやうに
 あまたの夢々を

吹きさらつてしまふ。

夏の夜、河畔

狂ほしく濕つてゐる

夏の夜の闇を

なんてまあ幾夜も、

わたしたちはいつしよに

公園に坐つて、

24

25

黒繻子のうへに輝く

黄金の飾金具のやうな

灯影を浮べてゐるハドソン河を

眺めたことか。

曲りくねつた小徑に添ふて

柵は低かつたので、

わたしたちは

それを飛び越えて

幸福しあはせの場所へ行つた。

すると、丘の下、

花を落す一本の樹が、

わたしたちを隠してくれた。

その時、あなたの

数多い接吻くちづけと花とが

しきりに落ち、

こやみなく落ち

26

27

わたしの頭髪かみのけともつれた……

はかない白い星々は、

ゆるやかに空に動いてゐた。

そして、今、はるか

匂ひ高い闇のなか

樹はふたたび

花をつけて戦たたかいでゐる。

なぜならば、六月がまた
めぐつて來てゐるから。

けれど、あゝ、今夜、

どんな少女が、

髪どめにからんだ今年の花を

鏡の前で夢み勝ちに

拂ひ落してゐるかしら？

今夜

月は黄金こがねの刻きざまれた花

空は静かで青い。

月は空が支へるために作られた。

そして、わたしはあなたのために。

月は莖のない花

空は明るく輝く。

「永遠」は月と空のために作られた。

「今夜」はわたしたちのために。

泣き聲

おゝあの人が見得る

あまたの目がある。

あの人を両手を喜ばす

30

31

あまたの手がある。

けれどあたしは

愛するあの人のために

ただの泣き聲であるだけのこと。

おゝあの人を頭を支へる

あまたの胸がある。

あの人を唇をあて得る

あまたの唇がある。

けれどあたしは
最後のその時まで
ただの泣き聲であるだけのこと。

灰色の目

32

四月のことでした。
あなたがはじめて
わたしのところへ来たのは。

33

そしてあなたの目を
はじめて見た時は
はじめて海を
見た時のやうな氣持でした。

わたしたちは
それからずっといつしよ
今や四度目の四月です。
揺れる柳の枝のうへに

青い芽の萌えるのを待ちながら。

けれど、

わたしにそそぐあなたの

灰色の目を見る時はいつも

はじめてわたしが

海を見た時のやうな氣持です。

賜物

わたしは最初の戀を

笑ひに與へました。

二度目の戀を

涙に與へました。

三度目の戀を

ずつとこの年までの

沈黙に與へました。

わたしの最初の戀は
唄をくれました。

二度目の戀は
見る目をくれました。

けれど、あゝ

三度目の戀でした。
魂をくれたのは。

36

37

わたしの心は重い

わたしの心は

あまたの唄で重い。

木をまげる

熟れた木の實のやうに。

けれど、その一つだつて

あげられない。

だつて唄は

わたしのものぢやないもの。

でも夕ぐれ、

薄ぐらいなかで

あまたの蛾が

飛びまはる時、

その灰色の時間に、

もし木の實が落ちたら

38

39

それを拾ふがいい、

だあれも知るまいから。

晝と夜

世界の半分も距ててゐる

ポーランドのワルソワで

わたしのいちばん愛するあの人

今日わたしのことを考へてくれた。

わたしは知つてゐる。
 だつてわたしは
 小鳥のやうに
 翼を得て飛んだのだもの。
 はろばろと吹き過ぎる風のなかに
 わたしはあの人の聲を聞いた。

羊齒しだの茂るところで

あの人の兩腕は
 わたしを卷いた。
 わたしは水溜りをさしのぞいた
 するとそこには
 あの人の顔があつた。

けれど、今は夜よる
 冷い星々が云ふ。

「ポーランドのワルソウは

世界の半分も距ててゐる。」

目つき

42

ステレフォンは、
春、わたしに接吻した。
ロピンは、秋、
わたしに接吻した。
けれどコリンは、

43

わたしを見たばかり、
けつして接吻しなかつた。

ステレフォンの接吻は、
じやうだんのなかに、
失くなつてしまつた。
ロピンの接吻は、遊びのなかに、
失くなつてしまつた。
けれど、コリンの

目つきのなかの接吻くちづけだけは、
夜も晝も、わたしにつきまどふ。

十一月

44

世界は疲れてゐます。
年は老ふけてゐます。
枯れ葉は喜んで
死にに行きます。

45

風は寒さにふるえながら
吹いて過ぎます。
褐色かしの蘆あしが
乾かき切つてゐるあたりへ。

わたしたちの愛も、
草のやうに死にかかつてゐます。
接吻くちづけをしたわたしたちは、
皮肉な親切を胸に抱きます。

風に吹かれて行く葉のやうに
わたしたちの古い愛が過ぎるのを、
半ば喜んで見るのです。

四月の夜

46
四月の夜は
静かであまい。
どの樹にもどの樹にも

47
花ばかり。
花へは静かな足どりで、
平和やすらぎが訪れるけれど、
わたしのところには来ない。
わたしの平和やすらぎは、
あの人の胸のなかに、隠されてゐる。
わたしはそこへ
行くことはなからう。
今夜、愛はすべての

ほかの人のところを訪れるけれど、
わたしのところには来ない。

ピエロ

48

ピエロは庭に立つてゐます。
青ざめた月のしたに。
そして琵琶を奏かなでます。
かよはい銀の調しらべべを。

49

ピエロは庭で遊んでゐます。
わたしのために
遊ぶのだと思つてゐますが、
わたしはまるつきり、
櫻の樹のしたに
忘れられてしまつてゐます。
ピエロは庭で遊んでゐます。

どの薔薇もみんな知つてゐます。
ピエロがじぶんの音楽を
好いてゐることを——
けれど、わたしは
ピエロが好きです。

別 後

50

わたしはわたしの愛を

51

たいそう廣く播きましたので、

あの方はどこでも

見つけるでせう。

それはあの方を、

夜でも目ざますでせう。

それはあの方を、

大氣のなかに包むでせう。

わたしはじぶんの影を、

あの方の見えるところに置きました。
 そして、わたしは希望の翼のぞみ つばさを
 それにつけておきました。
 といふのは、晝は
 雲になるかも知れませんし、
 夜は火の柱に
 なるかも知れませんから。

戀の後

もうなんの魔法もない。
 わたしたちは、
 ほかの人たちがするやうに
 逢ふばかり。
 あなたは、わたしに
 奇蹟を働きかけない、

わたしも同じこと。

あなたは風で、

わたしは海——

もうなんの輝きもない。

わたしは海邊の

水溜りのやうに

無頓着になつてしまつた。

54

55

けれど、たとへ水溜りが嵐や、

または、充ちてしまつた潮から

安全であつても、

それは海よりもつと苦^{にが}くなる。

よしや平^{やすら}静^{せき}はあるにしても。

河

わたしは日の輝く

谷から来ました。
そして、大海おほうみを求めました。
だつて、大海おほうみの灰色の
擴がりのなかで
平和やまらびがわたしのところに
來ることと思つたからです。

わたしはたうとう海へ来ました。
そして、海が荒れて

黒いのを知りました。
風もないあの谷に向つて
わたしは叫びました。

「親切にして下さい、
わたしをもとへ返して下さい！」

けれど、咽喉の乾いてゐる潮は、
陸をかへ走つて行きました。
鹽しほつからい波が、

わたしを飲んでしまひました。
そして、雨のやうに
すがくしかつたわたしは
今では海と同じやうに苦にがいのです。

唄の樹

58

わたしはほかの人に向つては、
わたしの唄をうたふ、

59

あなたに向つては、黙つてゐる。
わたしの唄の樹は、
輝く丘のうへで
すつかり葉を
落してしまつてゐる。

なぜなら、あなたは
おごそかな風のやうに來た。
そして、葉はすつかり、

遠く吹き飛ばされてしまった。
 ちやうど、世界の果を過ぎて
 忘れられてしまった
 もののやうに。

わたしの唄の樹は、

青い空に向つて

すつかり葉を落して立つてゐる――

わたしはほかの人に向つては、

じぶんの唄をやつた。

あなたには唄ではなく、

わたし自身をあげた。

平 和

平和やまらぎがわたしのなかに流れこむ。

ちやうど海邊の水溜りに

潮が流れこむやうに。

平和はもうわたしのものだ。いつまでも。
海のやうに退いては行かぬ。

わたしは生き生きした空を崇める
青い水溜りなのである。

わたしの希望は空のやうに高い。
だが、すつかりあなたのなかで
遂げられてしまつてゐる。

わたしは、日が燃えて沈む時には、
黄金の水溜りなのである。

あなたはわたしを深める空だ。

面にうつすために、

あなたの星を下さい。

四月の唄

やさしくも輝いてゐる

四月の衣きぬを着た柳よ。

すべてのわたしの夢に過ぎた

歲月のことを氣にかけてくれる？

春はわたしにとつて呼び聲であつた。

だが返事をするとはできなかつた。

わたしは、踊り手だつたのに

鎖さびしきで寂寥さびしきにつながれてゐた。

日をうけて輝く柳よ、

葉を静しずまらせて、

わたしの言葉に聞き入つておくれ。

たうとう、わたしは、春の呼び聲に

返事をする事ができるのだよ。

愛がわたしの身近みぢかくにある！

愛のなかに

63

わたしはあなたの愛のなかに住みたい。
あたかも海草が海のなかに住むやうに、
そして、波が寄せるたびに身をもたげ、
波が退くたびに身をすくめるやうに。
わたしのなかに集つて来た夢の魂を、
わたしはからつぽにしたい。

67

あなたの心臓が動悸うつにつれて、
わたしも動悸をうちたい。
そして、あなたの魂が導くままに、
わたしはついて行きたい。

祈 禱

わたしが今や死ぬといふ時に、
わたしに認めさせて下さいませ。

鞭のやうに肌を刺したけれど
 わたしが吹雪を愛したといふことを――
 あらゆる愛らしいものを愛して
 華やかな苦さを知らぬ唇で
 それらの愛らしいものから、
 苦惱を取らうとしたといふことを――
 わたしの魂の隅から隅まで、
 心が破れるかも知れぬことをも氣にかけず、
 ある限り力いつばいに

愛したといふことを――
 また、人生を人生のために愛して、
 あらゆるものに調子を整へて、
 子供たちが唄ふやうに、
 わたしが唄つたといふことを――

寶 物

彼等はわたしの唄を

見るたびに

溜息をついて

かう云ふであらう、

「哀れなる魂よ、

満ち足りない魂よ、

夜も晝も淋しさに。」

彼等はけつして

知らないであらう

70

71

わたしへの

あなたの愛をすつかり。

それは春よりも

確かなのに。

海よりも強いのに。

それは見えないうちに

隠されてゐる。

ちやうど

しわんぼが黄金を
冷たい風の吹く
荒れた野原に
隠してゐるやうに。

夏の嵐

72

豹ヒョウの風が
夜陰から躍り出る。

73

電いなづまの蛇は

身をよぢらして白い。

雷かみなりの獅子は

吼り狂つてゐる——

そして、わたしたちは

木のかげで、静かに座つて、

少しも不足を知らない——

わたしたちは、

いつしよに運命と逢つて

愛し合ひ、苦しみ合つて來た。

だから、わたしたちは、

なんだつて、

雨の怒りなんか怖れよう？

長い丘

74

ずつと前にその頂を

通り越したにちがひない。

15

今わたしは下へ降りてゐる――

頂を過ぎて、ちつとも知らなかつたのは

ふしぎだけれど、

茨がいつもわたしの

寛衣ガウンのはじをつかまへてゐた。

朝のうち、わたしは思つてゐた。

どんなにまあ誇らしいであらうと。

もしも風と日光に包まれて、

世界を足もとに見て、

その頂にまるで

女王のやうに立つたなら――

けれど、大氣はさすががしくなく、
たいした眺望も得られなかつた。

そこは人手で開いた道に添うて、

ほとんど平らであつた。

然も茨がわたしの

76

77

寛衣のはじをつかまへた。

けれど、後歸りをする^{あとがへ}ことを、

考へたつて仕方がない。

これからさきは、

ただ道を降つて行くばかりだ。

夕暮、紐育

わたしの市のうへにこめる

夕暮の青い埃。
 屋根と高い塔との
 はるかにつづく海のうへ、
 そこには
 数限りもない窓あかりが、
 からみのぼる蔓の花のやうに
 壁に咲く。

思
ひ

わたしがたつた一人の時、
 わたしのことをいちばん
 羨やましがつて下さい。
 その時には、わたしの思ひが、
 輝くひとかたまりとなつて
 わたしの周囲まわりに

飛びめぐるのですもの。

ある思ひは、

銀の装よそはひをしてゐます。

またある思ひは、

白の装よそはひをしてゐます。

いづれも、光りはなやぐ

蠟燭のやうです。

80

81

思ひの多くは、氣輕です。

なかには、

重くるしいのもゐます。

いづれも、

しなやかです、

ちやうど揺れてゐる柳のやうに。

ある思ひは、

莖を持つてゐます。

またある思ひは、

老利兒ロリールを持つてゐます。

燃える薔薇を持つて

隠れて行つてしまふのもあります。

わたしがたつた一人の時

わたしのことをいちばん

羨やましがつて下さい。

なぜなら、わたしは

82

83

女たちよりも男たちよりも

もつといい友達を

持つてゐますから。

天國の涯まで

階段きざしのやうに

年々をうちのぼつて

もし天國の涯まで

行かねばならぬとしても

わたしの傍近く

いつもゐて下さい。

そして永久とこほに變らぬ目まなざしを

注いで下さい。

時は葉が飛ぶやうに、

二人のうへに飛び過ぎるでせう。

でも、わたしたちは心配しません。

なぜなら

わたしたちは互ひに

變らぬことを知り合つて

生をものり越え、

死をものり越えてゐますから。

飛沫

わたしはあなたが、

夜どほし、わたしのことを

思つてゐて下すつたことを
知つてゐました。

わたしは知つてゐました。

あなたは遠く

離れてゐましたけれど。

ちやうど暗い風の

荒れる海が、

降りかかる飛沫しぶきで

わたしを濡らしたやうに

わたしのうへを吹く

あなたの愛を感じました。

愛する道は、

たくさんあります。

どの道にもそれぞれ

喜びがあります。

ですから、

荒れ狂ふ海が、夜どほし、

その飛沫しぶきを陸へ追ひやるやうに、

あなたがわたしのことを
 思つて下さるその飛沫しぶきが
 かかるだけでわたしは
 満足いたします。

六月の夜

おゝ大地よ、おまへは
 今夜はあまりに尊たつとすぎる。

あたりに雨のやうに
 匂ひがただよひ、
 遠くから大地に語る
 海の深い聲が聞えるのに、
 どうしてまあ、
 わたしは眠りこんでしまへよう？

おゝ大地よ、
 わたしの持つものは

みんなおまへがくれた。
 わたしはおまへを愛する、
 おまへを愛する、
 だが、お返しとして
 あげるものにならう。
 ただ、わたしが死んだ後の、
 この肉體のほかに？

冬の星

わたしはたった一人で、
 夜、出て行つた。
 海のかなたに
 流れてゐる若い血潮が
 わたしの精神の翼を浸した——
 わたしはじぶんの

悲しみを重々しく抱いた、

けれど、わたしが

雪のうへに揺れる影から

頭をあげた時、

わたしは東の方にオリオン星が

昔と同じやうにしつかりと

燃えてゐるのを見た。

92

93

わたしの父の家の窓から

冬の夜、夢を夢みながら

ほかの市まちの灯ともしびのうへに

少女をとめの頃、オリオン星を

眺めたことがあつた。

歲月は過ぎ、

夢も過ぎ、

また青春も過ぎる。

世界の心臓は、
その戦争の下で破れて
すべてのものが、
變つてしまつた。
ただ東の空、
星のまことある美しさのほかは。

朝の唄

朝のダイヤモンドが
わたしを一時間早く起してくれた。
暁があまたの星を
さらつてしまつて
かすかな白い月を残したのだ。

おゝ白い月よ、おまへは淋しい
 ちやうどわたしとおんなじだ。
 けれど、わたしたちは
 さまよふための世界を持つてゐる。
 淋しさといふことだけが、
 つまりは自由なのである。

玖馬の園で

木もくけ槿の花は火の酒盃

(戀人よ、愛しておくれ、

生は過ぎて行く)

輝かしいポインセティヤは

風にそよいで

眞まっか紅な葉つばが

吹き飛ばされてゐる。

とかけが頭をもたげて聞き入る――

(接吻くちづけしておくれ、

正午ひるが過ぎないうちに。)

空をかけまはる

大きな黒い鷹の目を

さへぎつてくれる

このセイバの樹のかげで。

98

99

五月の日

小鳥の唄の

やさしい糸すじが

大氣のなかにただよひ、

濡れた荒地の匂ひが、

あたりに隈なくひろがる。

楓の紅い小さな葉はどれも
手でつかまるやうに枝につかまる。
また、最初の聖餐式に出た
少女たちのやうに、
梨の樹はちんまりと立つてゐる。

おゝ、でもわたしは
空しく行つてはならぬ、
この風物を

多く愛することなしに。
わたしは唇で雨のしづくを感じ
手で草をさはらなくてはならぬ。

だつて、
雨の後に輝きわたる
五月の最初の日の世界を
今後ふただび見ることが
どうして

確かだと云ひ得やうぞ？

星を知つてゐる

わたしは星を知つてゐる。

その名前で。

アルデバランだの、

アルテヤだのと、

そして、

102

103

空の廣い青い階段をのぼる

星の道を知つてゐる。

わたしは男たちの

秘密を知つてゐる。

その目つきから察して

彼等の灰色の思ひや、

奇妙な考へが

わたしを悲しませたり、

賢くしたりした。

けれど、あなたの目は

わたしにとつては暗い。

しきりにわたしを

呼んでゐるやうだけれど。

わたしはあなたが

わたしを愛してゐるか、

それとも、まるつきり

104

105

愛してゐないのか、語ることができない。

わたしは多くのことを知つてゐる。

けれど、歳月は

來てはすぐに行つてしまふ。

わたしは、じぶんが

知りたがつてゐることを

知らずに死んでしまふであらう。

見られざるもの

だれからも見られずに。

死が建物のなかを

通つて行つた。

白い服を

引きずりながら

看護婦と尼僧にそうとが通り過ぎた。

106

107

死はどの病室の

戸口にも立ち止つた。

そして、人々の息をうかがつた。

人々はいかに近く

じぶんたちが

死のそばにゐるかを知らなかつた。

死が建物のなかを

通つて行つた。

看護婦からも尼僧からも見られずに。

死はいくつもの

病室の戸口を過ぎた――

けれど、ある一つの戸口から入りこんだ。

(病院にて)

苦 痛

波は海の白い娘、

雫は、雨の子供、

けれど、なぜ

輝く^{からだ}身體のわたしが

「苦痛」みたいな母親を
持つのかしら？

夜は星の母親、
 風は泡の母親——
 世界は美で
 充ち溢れてゐる。
 けれど、わたしは
 家にゐなければならぬ。

(病院にて)

八 時

夕餉ゆふけは五時に来る。
 六時には、宵の明星。
 わたしの戀人は、
 八時に来る——
 けれど、八時まではなかなか。
 どうして、一日中、

苦しみに耐えられよう。
 時計の針がこやみなく動いて、
 八時をわたしに
 持つて来てくれるのを、
 ちつと眺めてゐなかつたなら。

(病院にて)

與へる人

あなたは丈夫な草鞋わらぢを、
 わたしの兩足に結んで下さいました。
 あなたはパンと酒とを、
 わたしに下さいました。
 さうして、日と星々の下に、
 わたしを送り出して下さいました。

でも、全世界は
わたしのものでしたもの。

おゝ、草鞋をわたしの兩足から、
取り捨てて下さい。

あなたはごじぶんのなさることを
ご存じないのです、

でも、わたしの全世界は、

あなたの兩腕のなか、

わたしの日と星々は、
あなたなのでもあります。

神 祕

あなたの目は、

わたしを飲みつくします。

愛があなたの目を、

光り輝かします。

わたしの目にびつたりと
寄り添ふあなたの目よ。

わたしたちは、

長い間の恋人同志です。

おたがひの氣分の

範圍といふものを知つてゐます。

またいかに氣分が

變るかをも知つてゐます。

けれど、わたしたちが

おたがひを

ちつと見つめ合ふ時に、

やがて、わたしたちは感じます。

なんてまあ少ししか、

わたしたちは知り合つてゐないのだと。

その時、精神こころがわたしたちから

逃げて行きます。

おづおづとではあるが

自由に――

いつたいわたしは、

あなたをよく知ることができるのでせうか？

それとも、あなたがわたしを、

よく知ることができるのでせうか？

負 債

深くそして長く

わたしを愛してくれたあなたに

わたしは

なんの負債おひめがあらう？

あなたはわたしの精神こころに

翼をくれなかつた。

またわたしの心情こころに
唄もくれなかつた。

けれど、おゝ、ちつとも

愛してくれなかつたが

わたしからは

愛してゐたあの方かたに

天國の垣を行く

開かれた門を

わたしは

負債おひめとして持つてゐる。

夢でばかり

ただ夢のなかでばかり、

わたしが子供の頃に、

いつしよに遊んだ

子供たちの顔を見る。

ルイズは編んだ鳶色の
髪のままに歸つて来る。

アンニイは手入れをしない
深い捲毛で歸つて来る。

ただ夢のなかでばかり、

時といふものは忘れられてしまふ――

あの人たちはどうなつたか、

だれも知るまい、

けれど、わたしたちは

昔のやうに、いつしよに遊んだ。

そして、人形の家は、

階段の曲り角に立つてゐた。

歲月もあの人たちの

すべつこい丸い顔を、

とげとげしくはしなかつた。

あの人たちの目も、

やさしいままなのを知つた——
 あの人たちも、
 わたしと同じやうに、
 やつぱりわたしのことを
 夢に見るかしら？
 そして、あの人たちにとつて、
 わたしもまた昔のままの
 子供なのかしら？

薄 明

夢のやうに屋根々々のうへを
 冷たい春雨が降りしきつてゐる
 ずつと向ふの淋しい立木では
 小鳥が泣いてゐる。泣いてゐる。
 ゆるやかに大地のうへを

夜の翼が落ちはじめてゐる
わたしの心は立木の小鳥のやうに
泣いてゐる。泣いてゐる。泣いてゐる。

過失

126

あの人たちは
あなたの過失を告げに來た。
あの人たちは

127

いちいち過失を數へあげた。
わたしはそれが濟んだ時、
聲高に笑つた。
わたしはそれらの過失を
以前から知つてゐた。
おゝ、あの人たちは盲目めくら
あまりにも盲目めくらすぎて
その過失ゆえに、わたしが、
あなたを深く愛するのを知らぬ。

氣にとめまい

128

わたしが死んで、
わたしのうへに輝やかな四月が、
雨に濡れたその髪をふるふ時、
よしやあなたが、心破れて
わたしのうへにもたれようとも、
わたしは氣にとめはしないでせう。

129

わたしは平和やすらぎを持つでせう、
あなたも葉の茂つた木々が
雨のために枝を曲げられた時に、
静かであるやうに。
そして、わたしは今あなたが
さうであるよりも
もつと黙りこくつて、
もつと冷たい心になつてゐるでせう。

愛してよ

朝から晩まで、

わたしの頭上の葉かげで

唄つてゐる褐色の鶉つぐみよ、

わたしの戀人に

この四月の唄を持つて行つておくれ。

「わたしを愛してよ、

130

131

わたしを愛してよ、

わたしを愛してよ！」

わたしの戀人がその唄を聞く時、

わたしをなつかしがるやうに

しておくれ、そして、

仕事をしてゐても、遊んでゐても、

それをやめさせて、

かう云ひつけておくれ。

わたしを接吻^{キッス}してよ、
 わたしを接吻してよ、
 わたしを接吻してよと。

風

風がわたしの
 魂のうへを吹きます。
 わたしは夜通し

その呼び聲を聞きます。
 地上でわたしには
 平和^{やしろ}がないでせうか
 あなたをのぞいたほかには？

あゝ、風がわたしを
 賢くしてくれました。
 わたしのはだかの
 魂のうへを吹きました。

地上でわたしには
 平和やすらぎがないでせうか

あなたといつしよにゐてさへも？

あなたのももの

わたしはあなたのもものではない。

あなたの中に消えはしなかつた。

眞晝にとぼる蠟燭のやうに、

また、海に落ちる雪片せつぺんのやうに、

あなたの中に

消えたがつたとはいふものの、

やはり消えはしなかつた。

あなたはわたしを愛して下さる。

今もわたしはあなたに

美しく輝いた精神こころを見る。

だのに、やはりわたしはわたし。

光のなかに消える光のやうに、
 あなたのなかに
 消えたがつてゐるけれど、
 それは甲斐ないこと。

おゝ、わたしを愛のなかに
 深く投げこんで下さい。

あたかも吹き荒れる
 風のなかの灯ともしびのやうに

あなたの愛の嵐の力で吹き消して、
 わたしの感覚のはたらきを奪ひ、
 わたしを聾つんばで盲めくらであるやうにして下さい。

洋 燈

わたしが長い険せきしい
 暗黒の道を降くだる時に、
 もしもあなたの愛を洋燈ランプのやうに、

わたしの前に掲げることができれば、
 わたしは永久につづく影も怖くはない、
 怖がつて呼び聲をもあげはしない。
 もし神を見つけることができれば、
 わたしは見つけるであらう、
 もしもだれもが神を見つけないのなら、
 わたしはすこやかに眠るであらう。
 いかによくあなたの愛が、
 地上でわたしを満足させたかといふことを知つて、

まるで暗黒のなかの洋燈のやうに。

餘 燼

わたしは云つた。
 「わたしの青春は
 雨にうたれた火のやうに
 逝つてしまつた。
 もうけつして

揺ぐまいし、

唄ふまい、

また遊びもしまし。

風といつしよに。」

わたしは云つた。

「わたしの青春を

滅ぼしたのは

大きな悲しみの業わざではない。

むしろこやみなく

胸をうつ

あまたの小さな

悲しみの業わざである。」

わたしは青春が

逝つてしまつたと思つた。

ところが、あなたは

また歸つて來た、

風の招きにつれる

炎のやうに

青春は跳ねあがつた、

燃えあがつた。

青春は身をおほふ

灰の衣を拂ひのけて

新らしい衣に着換へた。そして、

花嫁のやうにみづからを

ふたたびあなたに委ねた。

音 信

わたしは夜、

呼び聲を聞きました。

千哩も彼方から

呼び聲は來ました。

まるで光の閃きのやうに

鋭いのです。

わたしの名です。

わたしの名です！

わたしが聞いたのは

あなたの聲でした。

あなたは目ざめて、

わたしを愛したのでした。

わたしもお返しの言葉を

送りますよ、

わかつてます、

わかつてます！……と。

冬の夜

窓硝子は

霜で光り

今夜、

世はひどく冷たい。

月は情なく、

風は

双双の剣で撃つやう。

神よ憐み給へ

家のない人たちを、

さまよつて歩く乞食たちを。

神よ憐み給へ、

灯影の落ちた

雪路を歩く

すべての貧しい人たちを。

わたしの部屋は六月のやうに

暖かで、びつたりと

帳が重なつてゐる。

けれど、どこかで、

家のない子供のやうに

わたしの心は、

寒さのなかで泣いてゐる。

報 償

わたしは孤獨をも、
破れた翼で
過ぎる時間をも、
渴^{かは}く身體も、
疲れた心をも、

148

149

變らぬ事物の痛みをも
喜ぶであらう。
もしも、
かはゆく、光に充ち、
また冬の夜空の
流れ星のやうに
静かで短かい
たつた一つの唄が
できるならば。

サンタ・バアバラ

わたしは二週間の日を
送つて嬉しかった。

わたしの愛は

歸るべきところへ歸つて來る。

金と銀に

光るのが空である。

150

151

瑠璃のやうに

なめらかなのが海である。

大地はその鳶色を

緑色に變えてしまつた。

音たてて降る

三夜の雨の後に。

そして谷では

紅雀たちが赤い嘴で

餌ついはを啄つんだり
 羽繕はうくろひをしたりしてゐる。
 山々のなか
 高い湖水のうへでは
 野生の白鳥たちだけが
 啼ないてゐる。
 けれどわたしは
 石のやうに静かだつた
 わたしの心は

ただ破れる時に唄うたふだけ。

愛あいしました

わたしは愛あいしました。
 海うみと灰色みどりの都みやこと
 花はなのもろい秘密ひみつと、
 音楽おんがくと、
 ひとときの間あひだ

天國をわたしにくれる
詩をつくることとを。

さては、

雪つもる丘のうへの星々と
親切で賢い

人たちの聲々と、

やがてのことに見交した
目に見出される

かの、長く隠されてゐた
情愛の目つきと。

わたしは多く愛し、

深く愛されました。

おゝ、わたしの精神の火が

弱く燃える時には、

暗闇と静けさのなかに

わたしをほつといて下さい。

さうすれば倦きて、
喜んで出て行くでせう。

牧場雲雀

嵐の後の銀の光のなか、
輝く新緑の雫したたる
枝々のかげ

牧場雲雀の聲聞くために

ひとり下道したみちを行く。
わたしは女王のやうに
心たかぶつてゐる。

生または死に、

なにをわたしは怖れるべきか。

夜の間の接吻くちづけと、

唄生れる時の飛びゆく白き喜びと、
銀の光のなかに啼なく牧場雲雀と、

それら三つのものを
知つてゐる生または死に。

變らないでせう

こんなにも長い年を経た後、
もう今となつては
變らないでせう。
別離わかれや涙をもつてしても

生はそれを破りはしませんでした。
死もそれを改めはしないでせう。
それはすつと生きづづけるでせう、
あなたのための
凡てすべてのわたしの唄うたのなかで、
わたしがこの世を去る時にも。

心の夢

わたしの心と胸の

あまたの夢が過ぎて行く。

一つもわたしのところへ

長くとまつてゐない。

けれど、わたしは子供の頃から

唄をいちばんの慰めにしてゐた。

160

161

もしも唄が

わたしから去るやうならば

わたしに死を見つけさせてほしい。

そして、昨日の雨のやうに、

奏でられて忘れられた

響きもつものと

いつしよにぬさせてほしい。

忘れてしまひませう

忘れてしまひませう、

花が忘れられるやうに。

かつて黄金色きんいろに燃えさかつた火が、

忘れられるやうに。

いつまでも、いつまでも、

忘れてしまひませう。

162

163

時は親切なお友達、

やがてわたしたちに、

年をとらせませう。

もしもだれかが訊ねたら、

もう忘れられてしまつたとおつしやう、

ながいながい昔に。

花のやうに、

火のやうに、

長く忘れられた雪のなかの
しづかな足音のやうに。

接吻

164
わたしはあの人
愛してくれることを望みました。
あの方はわたしの唇に
接吻くちうびをしてくれました。

165
けれど、わたしは
南の國までは飛べないのに、
卒如そつじょとして羽ばたきする
小鳥のやうです。

だつて、あの人
愛してくれるのを知つてゐますが
今夜、わたしの心は
もの悲しいのです。

あの人の接吻くちづけはさほど
心をうちはしません。
わたしの持った
すべての夢のやうに。

歸宅

あの人は歸つて來た、
あの人はここにゐる。

わたしの戀は、
家へ歸つて來た。
この一分一分は
飛んで行く泡よりも軽い。
この一時間一時間は
足に黄金の靴をはいた
踊子のやうだ。
この一日一日は
素足で早く走る年若い選手だ。

だつて

わたしの戀は歸つたのだ。

あの人は家にゐる。

あの人はここにゐる。

全世界のうちでいかなるものも

懐かしいあの人より

懐かしいものはない！

充 分

晝間はわたしにとつて充分です。

變らず輝く大地を、

あの方といつしよに歩くだけで。

夜はわたしたちのうへに

變らぬ大きな星々の屋根が、

遠くかすかであれば充分です。

わたしは風を
 縛らうとも思ひませぬ。
 海に足かせを
 はめようとも思ひませぬ。――
 わたしを掠めて音楽のやうに吹く
 あの方の愛を感じるだけで充分です。

歡 喜

わたしは氣儘だ、
 わたしは木々のために唄ふであらう。
 わたしは空の星々のために
 唄ふであらう。
 わたしは愛する、
 わたしは愛された。

あの人わたしのものである。
今やとうたう

わたしは死ぬことができる！

わたしは風と炎の

草鞋をはいてゐる。

わたしは火の心を持つてゐる、
そして與へる唄を持つてゐる。

わたしは草のうへをも、

星々のうへをも、

踏んで行くことができる。

今やとうたう

わたしは生きることができる！

鐘

秋の日暮の六時、

錆びた赤い色の西空、

谷では教會の鐘の音が、
この一日の死んだことを
呼ぶのだ。

第一の星が

鋼はがねのやうに鋭く現れる――
なぜわたしはふいに
かうも寒いのか？
離れ離れの音を

谷で響かす三つの鐘は
ものうさうに響いて鳴つた。

ベニスでの鐘、

海での鐘、

重々しくゆるやかな谷の鐘、――

日々が過ぎることを

忘れ得るところは

このごみごみした世界にはない。

春の雨

176

もう忘れてしまつたと
わたしは思ひました。
けれどまたふたたび
蘇^{よみが}へつてまゐりました。
今夜、騒がしく降る雨のなかの、
はじめての春雷の音につれて。

177

わたしは暗い扉口を
思ひ起しました。
そこにわたしたちは、
嵐のやむ間を佇んでゐました。
その時、雷鳴は大地をつかみ
稲妻は空に
なぐり書きをしてゐました。

驅けてゆく自動車は
揺れました。

だつて街路は

雨の河でしたもの。

洋燈ランプの光に染つた

黄金の波のなかに

自動車は突き進んで行きました。

狂ほしい春の雨と雷鳴のために

わたしの心は、

狂ほしく歡んでゐました。

あの夜、あなたの目は、

いつも唇が語るよりも

もつと多くのものを

わたしに語りました。

もう忘れてしまつたと

わたしは思ひました。